

第2回会議の振り返り

平成30年9月14日 行政経営課

議事(1) 人口減少・少子高齢社会に向けた自治体経営のあり方について

1 第1回会議振り返り → 内容に補足意見

(1) 主体

- ・実施主体を示すのは大切
- ・「今まで市だったが、今後は協働で行う」などの切り口は重要

(2) 広報

広報のあり方が重要、市民の理解や共感を得られるよう工夫すべき。

(3) 公共的活動が生み出す富を測る

ア 市民活動を数値化

- ・市民活動で地域が変わっていくのが分かる指標をつくる
- ・現状や実績を把握、目標を立て、成果を見せる
- ・公共的事業 市民活動が行われたら市の事業費はいくらになるか。
ボランティア活動を市の類似サービスで費用換算
⇒金銭に換算できない部分もある
→ 家事の例。再評価し、市民セクターをどのくらい豊かにして
いくかというふうに発想を変える。

イ 主体の割合を見せる

ウ 絶対値ではなく、変化量をとらえる (例: 5年前比)

(4) 市民セクターなどと分担する分野の見つけ方

ア 具体的な既存事業をぶら下げてみる

総合計画事業など既存事業を資料2 (中間報告に基づく議論の状況) に落とし込んでみる。空白が出る部分があるかもしれない。

イ 「地域で湧き上がる」ものを目指す

→市民セクターの活動をどう評価できるか考えるところへ行き着く。

2 秦野らしさ、特徴について

(1) 「水文化の確立が必要」

ア 水文化を施策の中心にすべき

- ・水は秦野の良さをPRする材料が多い。もっと生かすべき。

例：水道の歴史（全国3番目の近代水道、日本初民営水道、陶管水道）

例：野菜

※昨年度最適化支援専門部会「『おいしい水からできた〇〇』とつ
ないで括ると、秦野のイメージが上がるのではないか。」

- ・秦野の水の優位を示すデータを懸命に探してほしい。

イ PRは工夫が必要

- ・じやぶじやぶ池もPRのチャンス
- ・「良い水で作っている」と産業界と市と一緒にPRすべき。
- ・「秦野名水を使って製品をつくっている、売っている人がいる」という
ことが非常に大事。→地域住民、事業者に魅力として再発見してもら
い、生かしてもらうこと。
- ・水を汲みに来る市外の人はPRに協力してもらえないか。
- ・南アルプスの水は有名、北杜市の水と知る人は少ない。（売出し方）
- ・ブランド化は民間協議会にロゴ使用許可を任せる程度の緩さがよい。

(2) 工場見学の可能性

山梨県の製菓工場の例

見学後、アイスクリーム食べ放題、お土産を購入できる。

→不二家に工場見学を働きかける意義あり

(3) 交通インフラ（駅4つ）

- ・弱みととらえることが多い。

コンビニ2～3店舗で飽和。人口に対し駅（駅前）が多い。

→住む人で限定しない。外から人を惹きつける魅力持たせる

4駅あることを生かす方向で考える。各駅の特徴を生かす。

cf. プラス、マイナス両面（多面）で捉え、プラスになるよう方策
を考える。

- ・駅前は都心から離れても人気

ポレスター入居者はどこから転入か。入居理由は。調べてみるとよい。

※新総合計画の基礎調査として調整中。継続の方向を模索。

3 各部局の視点について

・市の各部局の視点（照会結果）紹介

景気動向調査のような現場感覚の結果である。

市民と対話して地方自治を充実、確立する材料とするとよい。

・課題の認識、状況予測、施策の考え方などを議論、今回会議へ継続

(1) 総合

ア 現状認識について

- ・人口減少・少子高齢化の影響はボディブロー。緩慢な危機を迎える。
- ・課題の噴出時期は一様でない。
- ・じわじわ影響が出るので、表現を工夫したほうがいい。

イ 施策の考え方

①どこから取り掛かるべきか

事業の取捨選択は、常に並行し、刺激し合う。

どこからというのではない。

②意思決定の仕組みから考えるとどうか

- ・意思決定の仕組みは従来のまま
- ・皆で検証し、制度の作り直しを促すことが必要。
- ・市民の思い（「地域の問題は自分たちの力で取り組める」）が必要
→・地域で生活する自分としての問題を、市民自ら確認してもらう、自分たちでできることに気付いてもらう
- ・市民が責任や問題意識を持って行政サービスを取捨選択するとともに、自身でできることを選別してもらう
- ・行政は、市民が地域の問題に向き合うのを支援すべき。
一人ひとりに問題意識を持ってもらうこと。
対話、情報公開、情報提供から始める

③カタストロフポイントの次の世界を考えるという方法はどうか

- ・投票行動は自分への利益誘導

自分にマイナスがくることは投票に結び付かない。

→カタストロフを前提に、カタストロフ後に、利益誘導する政治家が投票を受ける。

④問題の捉え方は分野か、全体か、重点を見出すのがよいか

□分野ごとの取組みが行われている

- ・公共施設再配置（先見の明あり、計画的）
情報を出しても、危機感ない状態は続く。
→他自治体に先駆けて動くのは結構難しい
「時代を読める自治体になれるか、勇気があるか」
 - ・水道、下水道（経営戦略を定めて、料金上げた）
⇒市民に現状を理解してもらい、安心して水を飲むにはどう負担すればいいか一緒に考えたい。市民から「値上げが必要」と言ってもらえるようにしたい。
 - ・介護
⇒市民ができるサービスはどこか、市民がやると介護負担給付費が抑えられるメリットをわかってもらうよう考えた。
- こういうことがこれからの課題
↓ だから
- ・市民へ情報提供、現状・状況の把握、相互理解を目指す（対話しながらきめ細かく）
 - ・問題をオープンにして共有する
→ 一人ひとりが責任を持てるようする
 - ・負担が増えるが、市民の利益に結びつくと示す

↔□分野ごとの取組みでは不十分ではないか

- 個別の取組みで人口減少・少子高齢化を乗り切れるのか。
→ 行政サービス自体の再配置や組み換え（ここは市民が担うなど）を考える必要があると思う。

□重点的な戦略を求める必要があるのではないか

- ・市は、今一番しなければならない施策を示す必要がある。
→ 「重点的な戦略」絞り込み必要
- ・構造の核は何か、現状認識から議論が必要。
→個別の取組みを積み上げ、重点を探るべきではないか。
(全体を捉えるのは難しい) cf. 政策同士の波及効果、貢献度？